潮文社刊

詩と人生

荻原井泉水

潮文社

詩と人生

荻原井泉水
明治17年東京に生まれる。東京大学文学科を卒業後，明治42年月刊句誌「層雲」を創刊。季題にかかわらない自由律俳句を提唱して俳壇に新風を送る。「層雲」は別に同人組織をもって運営をつづけ，現在706号に達する。ほかに個人雑誌として「随」を発行。日本芸術院会員。著書，句集等多数。鎌倉市山の内1535

昭和47年8月15日発行　©　¥ 680

著者　荻原井泉水
発行者　小島米雄
印刷所　文雅堂印刷株式会社

発行所　〒160
東京都新宿区坂町23番地
電話東京(357)3261(代表)
振替・東京69107
株式会社 潮文社

落丁本・乱丁本はおとりかえします　（千代田製本）

0095—1032—4664

目

次

1 自然・自己・自由……一
2 生命・生気・リズム……九
3 貫通するものは一なり……一七
4 此の一筋につながる……二六
5 生活の中に詩を……三四
6 思いよこしま（邪）無し……四三
7 日本の詩・短詩として……五〇
8 自己を自然の中に……五九
9 夕を思ひ旦を思ふべし……六六
10 人生観「奥の細道」……七七
11 自然観「奥の細道」……八五
12 〃まこと〃　〃不易流行〃……九四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

13 詩は志なり詩は人なり……一〇三
14 〝風雅〟の観念（雅と俗）……一一
15 後に来る者を待つ……一二〇
16 生を詩とす・詩を生とす……一二九
17 初めに詩ごころあり……一三八
18 風雅とツキナミ……一四八
19 封建思想と自由思想……一五六
20 大衆の中に詩を……一六四
21 大衆の詩として……一七三
22 全人的表現ということ……一八一
23 無一物中無尽蔵……一九〇
24 道あるゆえに歩く……二〇二

あとがき……二五
さし絵索引……二八

1 自然・自己・自由

私の人生観を要約して言えば――「自然」、「自己」、「自由」の三位一体ということである。この三つには「自」という語が共通している。「自然」「自己」「自由」の三自一体と称してもよろしい。

「自」はおのずからと訓ずる。またみずからと訓ずる。「おのずから」と「みずから」とは背反するかのように観念づけられている。例えば、夏目漱石の人生観は「天に則って私を去る」である。だが、私は「天」（自然）と「私」（自己）とは根本に於て一致すべきもの――「天に則って私を生かす」ことが本当ではないかと思う。「おのず

から」即ち「みずから」でなくてはならない。そこで、「おのずから」の心と「みずから」の心とが合致したならば万事考えること為すことにこだわりがなくなる、自由自在という境涯にはいることが出来る。これが人生のありかたでなければならない。

「自然」は「天然」と言ってもいいが、私が自然というのは天然現象そのものではなくて、自然の自然性ということである。nature というよりも naturality ということである。人間太古の時代には、いわゆる自然人であって、太陽とともに起き、夜がくれば眠り、身のまわりにある自然を摘み取って食としていたのだ。そうした生活はのんきでもあろうが、不安でもあった。暑いときは裸でも好いが寒くなれば身を蔽うものが欲しくなる。雨が降ればびしょ濡れではいられない。自己として生きるために、自然を防衛しなくてはならない。そこに自然と自己とを対立して感ずる観念が芽ぶいてくる。人間は人間同士の親和感を深くして、自然の力に負けまいとする。社会という組織が成立する。それから人間の歴史がはじまる。茫々、何万年——現代という今日では、自然を征服するという言葉もあるように、人間は自分の力を過信して、それ

大笑

が文化の世界であることを誇っている。だが、果してそれが人類の幸福の行きつくところなのであろうか。

原始的な自然人が雨露を凌ぐために、家らしいものを作るにしても、其の材料の木材や茅草は自然のものである。身にまとう衣類を作るにしても動物や植物の所産を借りなくてはならない。自然の庇護なくしては人間は生きていくことができない。人間が人間社会を発達させた結果として、光も熱もスイッチ一つ押せば人間の意のままになる電気文化の世の中ではあるが、この電源は大きな自然の懐からでている。それを忘れてはならない。

中国、周の時代に人間社会の秩序はかなり整っていた。そうした人間生活に理念を与えるために人間の道を説いたのは孔子である。そのとき、人間の道より以前に自然の道があることを説いたのは老子である。

自然の、人間のというけれども、突き詰めて考えれば恒久不変なる実体というものはない。達観すれば一切は「無」だということを説いたのは釈迦である。〝現実〟と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

して現われているものは〝現象〟だけである。いわゆる「色即是空」（しきそくぜくう）である。とともに「空即是色」（くうそくぜしき）である。この理法を悟れば、心にこだわりがなくなる。即ち自由を得る。一切の経文を要約したものと言われる「般若心経」という短い経文がある。「色即是空」という語も此の中にでている。そして「心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顚倒夢想、究竟涅槃」と説かれている。心に「罣礙」（こだわり）がなければ物を恐怖（おそれる）ということがない。生とか死とか、善とか悪とかいうこともたいしたことではないと知れば心がカラリとする。これが涅槃（ねはん）の境地であるが、それはつまり「自然」の姿であり、「自由」の心だということになる。

この般若心経を説く仏は「観自在菩薩」という名である。自在を観する菩薩ということである。「自在」即ち「自由」である。一体、「自由」という言葉は、「自ら由る」という意味であって、その物が自然としておのずから由りどころをもつままに（他から囚われることがなくして）自立しているということである。凡てのものは、それが

あるがままにして生かされなくてはならない。ところが、今の社会にあってはこれが難しい。人間は社会的生活をするために当然いろいろの制約を受けなくてはならないが、実際は多大に不当の制約を受けている。このような不当の——多くは権力というもの、慣習というものの——制約に依って「自己」がいためつけられている。その制約から脱却することは「自己」を取りもどすことであって、これが普通に言われている「自由」の精神である。

「自在」というのも「自由」というのも、根本は同じことだけれども、「自在」と言えばはじめから自由であること、「自由」と言えば、失われた自由を取りもどすこと。このような語感の差はある。東洋ふうの自由の観念は前者である。だから〝自由〟という語はあまり用いられないで、主として〝自在〟と言われる。西洋ふうの自由の観念は後者であって、不自由なるものから解放することを自由の理念としている。「自由主義」とは〈何物にも束縛されずに〉ということである。いずれにしても、〝自然〟のままであるべき〝自己〟を自己として生かすということである。

何といっても、我々の関心の最大事は〝自己〟である。そもそも自己とは何か――哲学的に考察することも意義があろうけれども、デカルトが「我思うゆえに我あり」と悟ったように、息（いき）をしているから生（いき）ているから〝自己〟があるので、いかに日日を生きがいのあるように生きるかということがかんじんである。それは〝自己〟を〝自然〟の心に従って生きること、〝自由〟の心に従って生きることにある。

私たちは心ばかりで生きられるものではないけれども、心無しにして生きられるものではない。人間、働いて食べて、子を生んで死んでいくだけのものではない。この世に生きて、生あるかぎりは、人、それぞれの人生観をもって、その一生を意義づけることがかんじんである。もちろん、人それぞれの人生観は違うであろう。だが、私は「自然、自己、自由の三自一体」ということを信念としている。私の「詩」はこの心から生まれる。詩というものは、詩を作る人それぞれにその理念は違うであろうけれども、私の詩は「自然」であり、「自由」であり、それを通して「自己」を表現し

たものである。そして、私とこうした信念を同じくするものが、此の道を共に歩んでいる。それは一般には〝俳句〟と名づけられている。だが、俳句という名はとかく誤解されやすい。一般に〝俳句〟と称せられているものには「詩として」の面と「遊びとして」の面とがある。世間の俳句の九十九パーセントまでは遊びの面に於ける俳句である。そういう俳句を私はここでは全く問題としない。僅か一パーセントであろうとも、詩としての俳句がある。「自然」の心を心とし、自由の心を心とし、それに依って自己のたましいを磨きあげていく、人間形成の道としての俳句がある。これは私の勝手の解釈ではない、（新しい解釈というのならばそれでもいいが）俳句の伝統的なるエスプリというものはここにある。

私はことし、八十八歳になる。俳句とは、自然、自己、自由を体得することに依って、またその体得をめざして修練することを以て道とする――ということを提唱してから、すでに六十年になる。私の詩的人生観は私と私の同志の人々の信念である。

2 生命・生気・リズム

〝自然〟とは何か。それがどうしてこの私の〝自己〟とつながるのか――それは〝生命〟がつながっているからである。我々の生命の根源は太陽である。此の地球の上に、何十億年以前のことであるか、生命というものが誕生し、進化に進化を重ねて、人間というものが創生される。それから何十万年をすぎてのち、ここに「私」があり「諸君」がある。我々の生命は百歳に満たず、短いものではあるけれども、短いなりにめいめいの生命を楽しむことはありがたいことではないか。宋時代の禅宗に霊雲和尚という人があった。此の人、修行時代に、人生とは何か、自己とは何かということ

を考えつめていた、長いこと坐禅もした、師匠にも教えをうけた。どうしても自分に合点のいく解答をさぐりあてることが出来なかった。あるとき、何げなく庭を見ていると、桃の木に桃の花がさいていた。桃の木に桃の花のさくのはあたりまえのことだが、霊雲は此のふしぎにおどろいた。去年も見、おととしも見ていたことだが、彼は生まれてはじめて見たように感激した。甲も見、乙も見ていることに違いないが、彼は自分ひとりが此の自然のうつくしさを見出したという気持だった。そのハッとした気持に、彼は禅で言うサトリを開いたのだった。自然の本源にある〝生命〟を感得したのだ。これは禅における名高い話だが、これを詩の話としてもいい。私の言う詩とはこういうものである。詩ごころとはこういうものである。花を見れば誰でも美しいと思うだろう。昔流に一瓢を携えて花見に行く。それもまた風流であろう。だが、そこに詩ごころがあるかどうか。

花のうつくしさははかないものである。はかないが故にうつくしいのだ。造花がいかに真に迫って作られていようとも、造花にはほんとうの美しさはない。生命という

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com